阮籍の「詠懷詩」(二)

鷹橋明久

前回(本誌第三十三号)は阮籍の「詠懷詩」―其一から其五までを取り上げ、その訳注を試みたが、今回は、「詠懷詩」―其六から其八までの詩を取り上げる。テキストは前回と同じく胡刻本『文選』に拠った。

詠懷詩―其六

昔聞東陵瓜	昔聞く東陵の瓜
近在青門外	近く青門の外に在り
連韞距阡陌	連なれる韞は阡陌に距りて
子母相拘帶	子母相拘帶す
五色曜朝日	五色朝日に曜き
嘉賓四面会	嘉賓四面より会せりと
膏火自煎熬	膏火は自ら煎熬し
多財為患害	多財は患害と為る
布衣可終身	布衣もて身を終ふ可し
寵祿豈足頼	寵祿は豈に頼るに足らんや

その昔、東陵公であつた召平が作つた瓜は、ここから程近い青門の外にあつたと聞く。その瓜畑の畛は連なつて縦横の道になり、大小の瓜は重なりあい連なつていた。それらの五つの色は朝日に輝いて、賓客が四方よりその瓜を食し

に集つたという。膏火は（その明るい性質のために）自らの体を焼き尽くし、（それと同様、蕭何が高祖に疑われたように）財産が多いこともかえって身の災いとなる。（召平のように）資産も何もない庶民として一生を終えるのがよい。（蕭何が高祖に受けたような）寵愛や俸禄など、どうして頼るに足ろうか。

*この詩について沈約は「当東陵侯侯服之時、多財爵貴、及種瓜青門、匹夫耳。寔由善於其事、故以味美見稱。連軼距陌、五色相照。非唯周身瞻己、乃亦坐致嘉賓。夫得固易失、榮難久恃。膏以明自煎、人以財興累。布衣可以終身。豈寵祿之足頼哉」（東陵侯の侯服の時に当たり、財多くして爵貴きも、瓜を青門に種うるに及んでは、匹夫なるのみ。寔に其の事に善みなるに由りて、故に味の美なるを以て稱せらる。連なれる軼は陌に距り、五色相照く。唯だに周身己を瞻ふのみに非ず、乃ち亦た坐に嘉賓を致く。夫れ得るは固より失ひ易く、榮は久しくは恃み難し。膏は明を以て自ら煎じ、人は財を以て累を興す。布衣以て身を終ふ可し。豈に寵祿の頼むに足らんや」と注する。

昔聞東陵瓜 近在青門外

「東陵瓜」秦のときに東陵公であった召平が、秦が滅ぶと布衣となり、長安城の東で瓜を作った。その瓜が美味であったことから東陵瓜と呼ばれるようになった。『史記』蕭相国世家に「召平者、故秦東陵公。秦破、為布衣。貧種瓜於長安城東。瓜美。故世俗謂之東陵瓜。從召平以爲名也。召平謂相国曰、禍自此始矣。上暴露於外、而君

守於中。非被矢石之事、而益君封置衛者、以今者淮陰侯新反於中、疑君心矣。夫置衛衛君、非以寵君也。願君讓封勿受。悉以家私財佐軍、則上心說。相国從其計。高帝乃大喜」（召平は、故の秦の東陵公なり。秦破るるや、布衣と為る。貧にして瓜を長安城の東に種う。瓜美なり。故に世俗は之を東陵の瓜と謂ふ。召平に従りて以て名と為すなり。召平 相国に謂ひて曰く、禍此れ自り始まらん。上は外に暴露するに、君は中に守る。矢石を被るの事に非ざるに、君の封を益し衛りを置くは、今者淮陰侯の新たに中に反くを以て、君の心を疑ふなり。夫れ衛りを置きて君を衛るは、以て君を寵するに非ざるなり。願はくは君 封を讓りて受くること勿れ。悉く家の私財を以て軍を佐けば、則ち上の心は説ばん。相国其の計に従ふ。高帝乃ち大いに喜ぶ」とある。

「青門」長安城にある門の名。霸城門ともいう。『漢書』王莽伝に「七月辛酉、霸城門災。民間所謂青門也」（七月辛酉、霸城門 災あり。民間の所謂る青門なり）とあり、顔師古の注に「三輔黄図云、長安城、東出南頭第一門、曰霸城門。俗以其色青、名曰青門」（三輔黄図に云ふ、長安城、東のかた南頭を出づるの第一門を、霸城門と曰ふ。俗に其の色の青きを以て、名づけて青門と曰ふ）

という。

連軼距阡陌 子母相拘帶

「軼」あぜみち。六臣注本『文選』、『古詩紀』二九、『漢魏六朝一百三家集』、『兩漢魏晉十一家文集』、『類聚』八七、『初學記』二八、『御覽』九七八は「軼」に作る。軼と軼は通じる。李善は「軼、當為軼」（軼、當に軼と為すべし）と注する。『說文解字』田部に「軼、井田間陌也」（軼、井田の間の陌なり）とある。

「距」至る。『尚書』益稷に「予決九川、距四海」（予九川を決して、四海に距る）とあり、孔安國伝に「距、至也」という。

「阡陌」田間の道。東西を陌といい、南北を阡という。その逆をいうこともある。『史記』秦本紀に「為田開阡陌」（田を為して阡陌を開く）とあり、索隱に「風俗通曰、南北曰阡、東西曰陌。河東以東西為阡、南北為陌」（風俗通に曰く、南北を阡と曰ひ、東西を陌と曰ふ。河東は東西を以て阡と為し、南北を陌と為す）とある。

「子母」子と母。李善は「子母、五色、俱謂瓜也」（子母、五色、俱に瓜を謂ふなり）と注し、劉良（五臣）は「子母、瓜之子母也」（子母、瓜の子母なり）と注する。大きな瓜（母）と小さな瓜（子）をいうのである。『拘帶』つなぎつらねる。劉良（五臣）は「拘帶猶連綴也」（拘帶は、猶ほ連綴のごときなり）と注す。「拘」

字、六臣注本『文選』、『古詩紀』二九、『漢魏六朝一百三家集』、『兩漢魏晉十一家文集』、『初學記』二八は「鉤」に作り、『六朝詩集』は「勾」に作る。

五色曜朝日 嘉賓四面會

「五色」五種の色。ここでは瓜の色のことを言っている。『礼記』礼運に「五色、六章、十二衣、還相為質」（五色、六章、十二衣、還りて質を相為す）とあり、孔穎達の疏に「五色、謂青赤黃白黒、據五方也」（五色とは、青赤黃白黒を謂ひ、五方に據るなり）とある。李善は「子母、五色、俱謂瓜也」（子母、五色、俱に瓜を謂ふなり）と注す。

「嘉賓」よい客。『毛詩』小雅・鹿鳴に「我有嘉賓、德音孔昭」（我に嘉賓有り、德音孔だ昭なり）とある。

膏火自煎熬 多財為患害

「膏火自煎熬」「膏火」は動物または植物の油脂を燃料にしてともし燈火のこと。『莊子』人間世に「山木自寇也。膏火自煎也」（山木は自ら寇するなり。膏火は自ら煎するなり）とある。燈火が燃焼することを擬人的に身を焦がすとしたのである。「煎熬」は火で乾かすこと。『說文』に「煎、熬也」とあり、段注に「凡有汁而乾、謂之煎」（凡そ汁有るを乾かす、之を煎と謂ふ）とある。また、『戦国策』魏策に「齊桓公夜半不嘆、易牙乃煎熬

燔炙、和調五味而進之」（齊の桓公 夜半に 嘆ざれば、
易牙 乃ち煎熬燔炙し、五味を和調して之を進む）と見
える。

「多財為患害」『漢書』疏黄伝に「賢而多財、則損其志、
愚而多財、則益其過」（賢にして財多ければ、則ち其の
志を損なひ、愚にして財多ければ、則ち其の過ちを益さ
ん）とある。多財はいずれにしろ身のためにはならない
ということ。この一句は蕭何のことを指して言っている。
「東陵瓜」の注を参照。「財」字、『六朝詩集』は「材」
に作る。「患」字、『六朝詩集』は「災」に作る。

布衣可終身 寵祿豈足頼

*この二句は、召平（布衣）と蕭何（寵祿）とを対比し

詠懐詩―其七

炎暑惟茲夏	炎暑 <small>えんしょ</small> 惟 <small>こ</small> れ茲 <small>こ</small> の夏
三旬將欲移	三旬 <small>さんじゆん</small> 將 <small>まさ</small> に移 <small>うつ</small> らんと欲 <small>す</small>
芳樹垂綠葉	芳樹 <small>ほうじゆ</small> 綠葉 <small>りよく</small> を垂 <small>た</small> れ
清雲自逶迤	清雲 <small>せいゆん</small> 自 <small>みづか</small> ら逶迤 <small>ゐい</small> たり
四時更代謝	四時 <small>しよじ</small> 更 <small>こも</small> こも代 <small>た</small> 謝 <small>し</small>
日月遞差馳	日月 <small>にちげつ</small> 遞 <small>たがひ</small> に差 <small>し</small> 馳 <small>ち</small> す
徘徊空堂上	空堂 <small>くうどう</small> の <small>ほら</small> 上に徘徊 <small>ほら</small> し
切怛莫我知	切怛 <small>せつたん</small> たり我 <small>わ</small> を知るもの莫 <small>な</small> し

ている。

「布衣」前述の『史記』蕭相国世家の「召平者、故秦東
陵公。秦破、為布衣」（召平は故秦の東陵公なり。秦
破るるや、布衣と為る）による。

「寵祿」寵愛と俸祿。ここでは蕭何のことを指している。
『左伝』隱公三年に「石碯諫曰、臣聞、愛子教之以義方、
弗納於邪。驕奢淫泆、所自邪也。四者之来、寵祿過也」
（石碯諫めて曰く、臣聞く、子を愛するものは之に教
ふるに義方を以てし、邪に納れず、と。驕奢淫泆は、自
ら邪とする所なり。四者の来るは、寵祿の過ぐればなり）
とある。

「豈」『六朝詩集』は「豆」に作る。

願観卒歎好 願はくは 歎好を卒ふるを観て
 不見悲別離 別離を悲しむを見ざらんことを

本当に暑さの厳しかった今年の夏ではあるが、その暑かった六月のひと月もまさに移りかわろうとしている。時に、かくわしい樹木は緑葉を垂れ、清らかな雲はひとりでにゆるらゆらとたなびいている。春夏秋冬の四季は次々と入れ代わり、日月は代わる代わる馳せている。人気のない座敷の中を行ったり来たりしながら、私の本心を知る人がいないことを思うと嘆かれてならない。私の心を知る真の友人との仲むつまじい楽しみをつくし、その人と別離の悲しみを味わわずに終わりたいものだ。

炎暑惟茲夏 三旬将欲移

「炎暑」きびしい暑さ。李善注に「南方為火而主夏。火性炎上。故謂夏月為炎暑也」(南方に火を為して夏を主るあり。火の性は炎上す。故に夏月を謂ひて炎暑と為すなり)とある。

「三旬将欲移」「三旬」は三十日。ここでは六月の一月を指すようである。張銑注に「三旬、謂六月之旬、欲入於秋也」(三旬とは、六月の旬の、秋に入らんと欲るを謂ふなり)とある。

芳樹垂緑葉 清雲自透迤

「清雲」「古詩紀」二九は「青雲」に作る。

「透迤」雲のたなびく形容。「楚辭」離騷に「駕八龍之婉婉兮、戴雲旗之委蛇」(八龍の婉婉たるに駕して、雲旗の委蛇たるを戴つ)とある。補注には「委蛇、一作透

迤」(委蛇、一に透迤に作る)とある。

四時更代謝 日月遞差馳

*この二句は『荀子』天論に「日月遞炤、四時代御」(日月遞に炤らし、四時代御す)とあるのによる。

「差馳」たがいに順序を以て馳せる。李周翰(五臣)は「差馳、言相次而奔馳也」(差馳とは、相次ぎて奔馳するを言ふなり)と注する。『古詩紀』二九、『漢魏六朝一百三家集』、『六朝詩集』は「参差」に作る。

徘徊空堂上 切怛莫我知

「空堂」人気のない座敷。「詠懷詩」其一七に「独坐空堂上、誰可與歎者」(独り空堂の上に坐す、誰か與に歎しむ可き者ぞ)とある。

「切怛」憂い嘆く様。『毛詩』齊風・甫田に「無思遠人、

「勞心切切」（遠人を思ふこと無かれ、勞心切切たり）とあり、毛伝に「切切、憂勞也」という。『六朝詩集』は「切怛」に作る。

「莫我知」『楚辞』離騷に「乱曰、已矣哉。国無人莫我知兮、又何懷乎故都」（乱に曰く、已んぬるかな。国に人無く我を知るもの莫きに、又た何ぞ故都を懷はん）とあり、王逸注には「言衆人無有知己、己復何為思故郷、念楚国也」（言ふところは、衆人の己を知るもの有る無

きに、己も復た何為れぞ故郷を思ひ、楚国を念はんや）とある。

願覩卒歎好 不見悲別離

「卒歎好」「歎好」はよろこび好む。「卒」はおわる。つきる。やむ。『爾雅』釈詁に「卒、滅、畢、盡也」とある。「卒歎好」、『六朝詩集』は「平生好」に作る。このようにすると、「かつての仲睦ましさ」の意となる。

詠懷詩―其八

灼灼西隕日

餘光照我衣

迴風吹四壁

寒鳥相因依

周周尚銜羽

蛩蛩亦念飢

如何当路子

磬折忘所歸

豈為夸譽名

憔悴使心悲

寧與燕雀翔

不隨黃鵠飛

黃鵠遊四海

灼灼として西に墜るる日

餘光は我が衣を照らす

迴風は四壁を吹き

寒鳥は相因りて依る

周周は尚ほ羽を銜み

蛩蛩も亦た飢ゑを念ふ

如何ぞ当路の子

磬折して歸る所を忘るる

豈に夸譽の名の為に

憔悴して心をして悲しま使めんや

寧ろ燕雀と與に翔り

黃鵠に随ひて飛ばざれ

黃鵠 四海に遊くも

中路将安帰 中路にして将た安にか帰らん

あざやかに輝きながら西に沈もうとする太陽、その余光が私の衣を照らしている。つむじ風が四方の壁にふきつけると、鳥が寒そうにお互いの体を寄せあう。周周という鳥は、尾に水を含んで水を飲みあうというし、蛩蛩という獣も、飢えを恐れて相棒の蹶とともに行動する。それなのに官職にある人たちは、どうして身を折りまげて（出世することばかりを考え）、本来帰るべき所を忘れてしまったのだろうか。どうしてむなしい名譽欲にかられて、やつれはて悲しまねばならないのか。むしろ燕や雀の輩と一緒に飛んで、黄鶯の志をもつ士と一緒に飛ぼうなどとは思わぬことだ。黄鶯は遠い四方の海に飛び立つが、途中で力つき（黄鶯を）追いきれなくなつたなら、一体どこに帰るつもりなのか。

灼灼西隕日 餘光照我衣

「灼灼西隕日」あざやかに輝きながら西に沈もうとする日。「灼灼」は『新書』匈奴に「陛下已諾、若日出之灼灼、則信論矣」（陛下は已に諾し、日出づるの灼灼たるが若きは、則ち論を信ずればなり）とある。「詠懐詩」其一二にも「夭夭桃李花、灼灼有輝光」（夭夭たる桃李の花、灼灼として輝光有り）と見える。「西隕日」は『楚辞』九歎・遠逝に「日杳杳以西頽兮、路長遠而窘迫」（日は杳杳として西に頽れ、路は長遠にして窘迫す）とある。六臣注本は「隕日」を「頽日」に作る。「餘光」日没後に残っている光。また、夕日の光。「詠懐詩」其八二に「垂影臨増城、餘光照九阿」（影を垂れて増城に臨み、餘光は九阿を照らす）とある。

迴風吹四壁 寒鳥相因依

「迴風」つむじ風。「詠懐詩」其五七に「驚風振四野、迴雲蔭堂隅」（驚風 四野に振ひ、迴雲 堂隅を蔭ふ）とある。

「四壁」家の四方を囲んでいる壁。
「寒鳥相因依」沈約注に「天寒、即飛鳥走獸尚知相依」（天寒ければ、即ち飛鳥走獸は尚ほ知りて相依る）とある。

周周尚銜羽 蛩蛩亦念飢

「周周尚銜羽」「周周」は鳥の名。『韓非子』説林下に「鳥有翮翮者。重首而屈尾。将欲飲於河、則必顛。乃銜其羽而飲之」（鳥に翮翮といふ者有り。重き首にして屈れる尾あり。将に河に飲まんと欲すれば、則ち必ず顛る。乃ち其の羽を銜みて之を飲む）とある。

「蛩蛩」蛩蛩距虚ともいう獣。『呂氏春秋』慎大覽・不

広に「北方有獸、名曰蹶。鼠前而免後、趨則跲、走則顛。常為蚤蚤距虛、取甘草以與之。蹶有患害也、蚤蚤距虛必負而走。此以其所能、託其所不能」(北方に獸有り、名づけて蹶と曰ふ。鼠前にして免後、趨れば則ち跲き、走れば則ち顛る。常に蚤蚤距虚の為に、甘草を取りて以て之に與ふ。蹶に患害有るや、蚤蚤距虚必ず負ひて走る。此れ其の能くする所を以て、其の能くせざる所に託するなり)とある。

如何当路子 磬折忘所歸

「当路子」仕塗にある人。すなわち官吏。「孟子」公孫丑の「夫子当路於齊、管仲・晏子之功、可復許乎」(夫子は路に齊に当らば、管仲・晏子の功、復た許す可きか)が出典。

「磬折」身を曲げて仕えることをいう。「詠懷詩」其二に「悦懌若九春、磬折似秋霜」(悦懌すること九春の若く、磬折すること秋霜に似たり)とある。

豈為夸誉名 憔悴使心悲

「夸誉名」体のよい誉れ。名誉欲。「呂子春秋」孟春紀・本生に「古之人有不肯貴富者。由重生故也。非夸以名也。為其實也」(古の人に貴富を肯ぜざる者有り。生を重んずるに由るの故なり。夸るに名を以てするに非ざるなり。其の實を為さんとするなり)とある。また、「詠

懷詩」其三十に「征行安所如、背棄夸誉名」(征行安んぞ如く所あらん、夸誉の名を背棄せん)と見える。「憔悴使心悲」沈約は「当路者知進趨不念暮歸。所安為者惟夸誉名。故致憔悴而心悲也」(当路の者は進趨を知りて暮に歸るを念はず。安為する所の者は惟だ夸誉の名なるのみ。故に憔悴して心悲しむを致すなり)と述べる。

寧與燕雀翔 不隨黃鵠飛

*この二句について沈約は「若斯人者、不念己之短翮、不隨燕雀為侶、而欲與黃鵠比游。黃鵠一舉冲天、翱翔四海。短翮追而不逮、將安歸乎。為其計者、宜與燕雀相隨。不宜與黃鵠齊舉」(斯の若き人は、己の短翮を念はず、燕雀に隨ひて侶を為さず、而も黃鵠と比游せんと欲す。黃鵠は一たび舉がれば天に冲り、四海に翱翔す。短翮もて追ふも速ばざれば、將た安くにか歸らんや。其の計を為すは、宜しく燕雀と相隨ふべし。宜しく黃鵠と齊しく舉がるべからず)といい、人はそれぞれ分に應じた生き方をするべきだ、の意で解釈している。ところで、「詠懷詩」には、この二句のように大きな鳥と小さな鳥との対比がしばしば見られる。この詩のように小さな鳥を肯定するもの(其四六)もあれば、逆に大きな鳥の方を賞賛するもの(其二一、四七、四八)もある。

「燕雀」つばめとすずめ。転じて小人物のこと。「史記」陳涉世家に「陳涉少時、嘗與人傭耕。輟耕之壘上、悵恨

久之、曰、苟富貴無相忘。備者笑而応曰、若為備耕。何富貴也。陳涉太息曰、嗟乎燕雀安知鴻鵠之志哉」(陳涉少き時、嘗て人と與に備耕す。耕を輟めて壘上に之き、悵恨すること之を久しうし、曰く、苟し富貴となるも相忘ること無からん。備者笑ひて応へて曰く、若備耕を為す。何ぞ富貴ならんや、と。陳涉太息して曰く、「嗟乎燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」、と)とある。『史記』会注考証には「顔師古曰、鴻、大鳥也。水居。鵠、黄鵠也。一挙千里」(顔師古曰く、鴻は大鳥なり。水に居る。鵠は黄鵠なり。一たび挙がれば千里なり)とある。

「黄鵠」大鳥の名。黄色を帯びた白鳥。大才の人のたとえ。『楚辞』卜居に「寧與黄鵠比翼乎、將與鷄鶩争食乎」(寧ろ黄鵠と翼を比べんか、將た鷄鶩と食を争はんか)とある。

黄鵠遊四海 中路將安歸

黄鵠は遠い四方の海に飛び立つが、それを追って途中で力つき、追いきれなくなったならば、一体どこに帰るつもりだ、の意。「中路將安歸」の部分の主語を黄鵠として解釈するものもあるが、これには従わない。先に挙げた沈約注に従い、このように解釈した。